

聖書の中で私達が特に興味を持つものに奇跡物語があります。病気の人が癒されたり、僅かな食物で大勢の人が食事をしたり、悲しんでいる人が慰められたり、非常に多くの奇跡物語が記されており、これらはすべて主イエスが神の国の力を示されたものですが、私達はつい、その業の大きさの故に驚いてしまうのですが、その驚きから少し離れて、主イエスが奇跡によって単に人々を驚かせたのではなく、実は何を伝えようとしていたのかを考えることは極めて重要であります。

本日の福音書にでてまいりましたのは一人の目の不自由な人の物語でした。視力は私達人間の感覚のなかで最も重要なものです。そして聖書の時代から二千年近くたった現在でも、視力を失った人、生まれたときから視力のない人の視力を回復させることは困難です。視力しょうがい者は一級のしょうがい者と認定されることから、その重要性がよくわかります。主イエスが出会われたのはそういう人だったのです。

さて、当時しょうがいや病気を持っている人は、過去に何か悪いことをしたり、罪を犯したからそのような罰が与えられているのだと考えられていました。生まれつきしょうがいを持っている場合は、親に罪があるからだと考えていたのです。すなわちしょうがいのある人はすべて、自分が罪人であり、その責めを負っているのだというのです。弟子たちが、「ラビ、この人が生まれつき目が見えないのは、だれが罪を犯したからですか。本人ですか。それとも、両親ですか。」と尋ねたのは当時の常識によるものでした。しかし主イエスはそれをはっきりと否定なさいました。「本人が罪を犯したからでも、両親が罪を犯したからでもない。神の業がこの人に現れるためである」。それは主なる神の業がこの人に働くためだというのです。

25年ほど前の2月、当時赴任しておりました静岡県の清水聖ヤコブ教会の婦人会の方々と静岡市内にあります知的しょうがい者の受産施設、「かなの家」にお伺いいたしました。その際、責任者の方はこのようなお話をしてくださいました。「私達スタッフは在園者を仲間と呼んでいるが、日常生活のなかでよく仲間との衝突が起きる。後でスタッフが集まり何故そのようなことになってしまったのか、何故自分はそのようなことを言ったのかを考えてみると、問題があったのは実は仲間ではなく、自分達に問題があったのだと気づかされることが多い。本当に仲間達の自由さに驚かされている。主なる神は私達に自分の不自由さを気づかせるために、しょうがいを持つ人々をこの世に生まれさせたのではないかと思っている」。ということでした。これは本当に私達が耳を傾けるべき言葉ですが、本日の福音書もそれと同じことを言っております。

この人は、実は二重に目を開かれていたのです。まず最初に肉の目、視力が与えられたこと、そして最後のところで、「主よ、その方はどんな人ですか。その方を信じたいのですが。」イエスは言われた。「あなたは、もうその人を見ている。あなたと話しているのが、その人だ」。彼が、「主よ、信じます」と言って、ひざまずいた。とありますように心の目が開かれたことです。この人は主イエスを信じることによって肉の目と心の目の両方が開かれるという喜びを与えられたのです。

それに対してファリサイ派の人々、すなわち律法に詳しい民衆の指導者達はどうだったのでしょうか。偉大な天国の業が示された人を前にして、その事実を認めないどころか、彼らは、「お前は全く罪の中に生まれたのに、我々に教えようというのか」と言い返し、彼を外に追い出したのです。彼らにとって目の見えない、勉強もしたくない人が主なる神

について自分達に語るなど考えられないことだったのです。教えるのは自分で聞くのは民衆、律法を守っているのは自分で守らないのは民衆、罪を犯さないのが自分達で正しく生きる事の出来ないのが民衆、そのように考えていたのです。だからこの目の見えなかった人を通して主なる神の力が示されても、彼らはこの人を追い出すことしか出来なかったのです。主なる神について一番よく知っており、救いに一番近いと信じて疑わなかったファリサイ派の人々は、実はこの目の見えない人より遥かに不自由であり、主なる神の声を聞くことが出来なかったのです。

主なる神は私達に色々なかたちで御心を示されます。特に人の口を通してみ心を示されます。聖書のなかでよく、「ペトロが聖霊に満たされて言った」というような表現がありますが、これは主なる神の御心がペトロを通して語られたと言うことに他なりません。

主イエスに一番重んじられた弟子であるペトロは、弟子になる前漁師でした。主イエスに初めて出会った日、収穫は何もありませんでした。長年の経験を生かしても獲物は得られず、もう漁の時間も過ぎておりました。そこへ主イエスが現れて漁を試みるように勧めたのです。ここでペトロが、「自分は漁師なのに、大工が私に教えるつもりか…」と思ったならば、主イエスとの出会いはなかったことでしょう。主イエスはすべてを超えた方であること、ペトロがその主イエスに従順に従う心を持っていたので、主イエスに最も重んじられる弟子となっていたのを私たちは学びます。

本日は大齋節第4主日、大齋節の前半と後半を分ける節目の日曜日になります。本日は大齋の中日と呼ばれ、厳粛な大齋節前半を振り返り、今日は一休みして後半に臨もうという主日です。食べたいものを何か我慢して過ごしていた人は、今日はおいしいものでも食べて後半に臨もうとすることもよくあったようです。今年はコロナウイルスの影響で緊張が続き、大齋節も守りにくい日々が続いているのではと思いますが、主の導きを祈りつつ、大齋節後半を共に過ごしていきましょう。